海に夜を重ねて

若竹

河出書房新社

若一光司（わかいちこうじ）
昭和二十五年、大阪市生れ。
大阪市立工芸高校美術科卒。
本作品で昭和五十八年度文藝賞を受賞。

海に夜を重ねて

一九八四年一月二五日　初版発行
一九八四年二月二五日　再版発行

著者　若一光司

装画　林　静一（カバー・扉）

装幀　杉浦康平

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
営業　〇三―四〇四―一二〇一
電話　編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷　東洋印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります

©1984
Printed in Japan

海に夜を重ねて

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

睡眠不足の朝は、必ずと言ってよいほど下痢になる。それに、二日酔いのままで下すウンコはどうしようもなく悪臭を放つ。自分がこの地球上で最もいかがわしい生物に成り下がってしまったのではないかと思えるほど、それは悲しくみじめったらしい臭さだ。

目覚めたばかりの姿で駆けこんだ便所で、膝を抱えるようにしゃがみこんだまま、私は思わず声を出さずに泣き出していた。

胃や腸だけではなく内臓のすべてまでもが下痢症状を起こしているようで、全身がグニャグニャと腐り切ったコンニャクみたいにねばりこんでゆく。からだ中のありとあらゆる力が逃げ出してゆき、フワフワと浮かび上がってしまいそうにこころもとない不快感の中を、液体状の便だけがはっきりとした感触を残してけたたましく落ちてゆく。

「マミちゃんだろ？」
ペンキのはげた板壁一枚へだてた隣の便所から、突然、本番マナ板ショーの晴美姉さんの声がした。
「うん、そう」と、私は涙を感じ取られないように短く答える。
「やっぱりマミちゃんだ。その下痢便の音を聞きゃあ、この楽屋の人間なら誰だってあんただと思うよ」
いつもの歯切れのいい明るさで、晴美姉さんが太い声を響かせる。
「一度医者にみてもらいなよ。下痢でもクセになっちゃうとからだに悪いよ。もっとも、そういう私の方は十年来の便秘症で、あんたの下痢がうらやましいぐらいだけどさ。もうこうやって十五分もしゃがみこんでいるのに、ガス以外はなんにも出やしないんだから」
少し開いた便所の窓からは斜めの日差しがまぶしくさしこんできて、ホーロー製の汚物入れが光を一身に浴びながら、キラキラと必死に純白の輝きを返している。まるで、血に汚れたナプキンや海綿を腹いっぱいに呑みこんでいることを悟られまいとするかのように。

「それにしても、きのうの晩はびっくりしたよ。あんたがあんなに大声で叫ぶんだもの。それに、民ちゃんときたら、まるで気が狂ったみたいだったわねえ。なんてったって男は男よ。いくら民ちゃんだっていざとなりゃあ大の男だから、女の私たちじゃあどうしようもないもんね。あん時、もしもうちのダンナがいてくれなきゃあ、あんたはあのまま絞め殺されてたかもしれないよ」

晴美姉さんの言葉に、一度はおさまりかけていた涙がまたぶり返してきて、私は膝を抱えた腕に顔を押しつける。こらえ切れない淋しさのようなものがむき出しの下半身に沈澱し、尿道口のあたりが内側に向かってキューッと硬直してゆく。

「民ちゃん、まだ帰ってこないの?」と、口調をくもらせて姉さんがきく。

「うん、まだ……」

「もしかすると、民ちゃん、もう帰ってこないんじゃない?」

「そうやね、そうかもしれんわね……」

私は答えながらトイレットペーパーを引きちぎり、それで涙をぬぐい鼻をかんでから、ていねいに何度も何度もお尻をふく。便所紙など使う必要もないほど健康だった子供のころが、なさけないほどになつかしい。

勢いよく水を流して便所を出た私が洗面台で手を洗っていると、晴美姉さんが何も流さずに出てきた。日本人ばなれしたグラマラスな肢体に水玉模様の小さなパンティーだけをつけ、まだ眠気のへばりついた目を両手でこすりながら、姉さんは私のうしろで立ちどまった。

「本当に、民ちゃん帰ってこないかもしれないの？」と、人のよい心配顔で姉さんがたずねる。

私は目の前の鏡に映った姉さんの顔に向かって、「もしかしたら……」と答えてみせる。そしてもう一度、声を出さずに同じ言葉をくり返しながら、今度は鏡の中の自分をのぞきこむ。

「だけど、もしもそうだとしたら、あんたどうするのさ？」

「どうもせえへん。そやかて、もうどうしようもないことやし」

「でも、あんたも淋しくなるんじゃない？」

「もうええの。ほんまに、もうええんよ」

ひきつった作り笑いでそう言う私の顔を妙に安堵を浮かべた表情でながめながら、

「そうね……あんただって、その方が気がラクかもね」と、なぐさめ口調で姉さん

が言った。
「そのとおりやよ。これで大分と身軽になれるわ」
精いっぱいの明るさでそんな言葉を返したとたん、劇場から道一本へだてたホテルから、団体客到着歓迎のマーチが大きなヴォリュームで響いてきた。
「あら、もうそんな時間かしら？　そういえば今日は土曜日だから、またきっと大入袋が出るだろうね。たった千円の中身なのに、あれをもらうとすごーく得した気分になっちゃう。不思議なもんね」
晴美姉さんはちょっとだけ首をかしげてつぶやき、肉のもりあがったお尻をなやましくゆすりながら出ていった。
一人残った私は、ふたたび鏡の中の自分の顔をのぞきこむ。寝起きの乱れた髪がわびしく額にまつわりついているそのすぐ下で、赤黒く濁った目がおびえたように何かを探している。
それはまるで、迷子の目だ。人混みの中にたった一人取り残され、泣き声すらあげることもできずにただただ不安を抱えこんで立ちすくむばかりの幼い迷子……。
「民ちゃん、どうしてるん？　民ちゃん、お願いやから帰ってきて……」

耐え切れぬ感情に押しつぶされそうになってつぶやいた瞬間、マーチの音が一段と高くなって私の鼓膜を打ちのめしていった。

「石、ぼくの石、どこにやった?」

昨夜、最後のステージを終えて手早く入浴を済ませた私が楽屋の自分の部屋に戻ると、待ちかまえていたように民夫がきいた。

「あんなもん、もう捨ててしもうたわ」

私は全裸にバスタオルを巻きつけただけの姿で、無造作に答えた。

「捨てたって、ほんとに、ほんとに捨ててしまったの?」と、民夫は驚きで目をむいた。

「そうよ。あんたがあんまり石ばっかりいじってるから、ウチ、もう頭にきてしもうて、さっきあんたが便所に行ってたあいだに捨ててしもうたった」

「ひどいよ! どうしてそんなことするの? ぼくの石なのに、ぼくの大切な石なのに!」

「ええ加減にしてよ。あんたいったい何を考えてんの? あんな石ころ並べながら、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いったい何を考えてんのよ？　もうええ加減にしてほしいわ！」
かん高く声を荒立てた私に圧倒され、民夫はばかでかい図体を縮めるようにして後ずさりしながら、「このまどから外に投げすてたの？」とこちらをにらみつけた。
「ああそうやよ。田んぼに向かって思いっきり投げつけてやったから、もう今ごろは泥の中にめりこんでしもうてるわ」
私がそう言いおわらないうちに、民夫はドアを蹴って部屋を飛び出し、転がり落ちるように階段を降りていった。
その姿が、私の心をまた暗くした。
下着を身につけ、淡いブルーのナイトウェアを羽織ると、私は一人で飲み始めた。一週間ほど前にファンのお客さんが差し入れてくれたブランデーをストレートで飲みながら、民ちゃんのアホ、民ちゃんのアホ！　と、私はグラスに向かって果てしなくくり返していた。
隣の部屋からは、晴美姉さんとマネージャーの明さんとがからみ合う音が聞こえる。あの二人は人目をはばかることなく、いつでも楽屋の中でおおっぴらにセックスをする。特に晴美姉さんがラストステージを終えたあとには、はげしい気配で求

め合い、呻き合う。まるで客に奪われたもののすべてを取り戻そうとでもするかのように、二人はすさまじくみだらに愛し合うのだ。

うすっぺらい壁をはさんで、もう慣れっこになってしまったそのようすを耳にしていると、私はまた、晴美姉さんから聞いた話を思い出してしまう。

三年前に姉さんが初めて明さんと会った時、姉さんは浜松の肴町でキャバレーのホステスをしており、明さんは通りすがりに立ち寄った客だった。どちらからともなく意気投合した二人は、その夜、近くのホテルに泊まった。しかし、肝心の瞬間になっても二人は結ばれることはなかった。明さんが完全な不能におちいってしまっていて、姉さんがいくら力を貸してもどうにもならなかったからだ。

遠い親戚に養子で婿入りしたものの、家族ぐるみで新興宗教にのめりこんでいたその家の家風や病的なまでに神経質な奥さんと折り合いが悪く、毎日毎日浴びるほど酒を飲んでいるうちにいつのまにか不能になってしまったのだと、明さんは姉さんに打ちあけた。

「どうしようもなく弱い人に思えたから、どうしようもなく好きになってしまった」姉さんは、その夜以後、明さんとひんぱんに会うようになり、可能なかぎりの

努力を払って明さんが男に戻れるように尽くした。その甲斐があったのか、二人が知り合ってほぼ半年目に何の前ぶれもなく突然に明さんが男に戻り、姉さんのからだの中で野獣のように暴れまくったあげく、多量の精液を一気に噴き出して果てたという。

晴美姉さんはその時のことを、「うちのダンナときたら、そのあとでまるでちっちゃな子供みたいに大粒の涙をポロポロこぼしながら、ありがとう、ありがとう、って私の手を握りしめて土下座するじゃない。その姿を見ていると、私、女に生まれてきて本当によかったって、つくづくそう思ったわ」と、まるできのうのことのように頬をゆるめて話してくれた。

結局、明さんは一千万円という巨額の縁切り金を背負ってその家を捨て、姉さんと暮らし始めることになった。姉さんが二年前にストリップの世界に飛びこんだのも、その金を一日も早く払い終えるためだった。

「お金をぜんぶ払い終ったら、その日からもう一年間だけ舞台をつとめるの。そして、その一年間に稼ぐお金をもとにして、どこか知らない田舎町で小さな喫茶店でも開くつもりさ。細々とした暮らしでいいから、ダンナと二人でのんびりと生きて

ゆく。あんまりにも小さ過ぎる望みかもしれないけど、私たち二人にはちょうどそれぐらいの夢がふさわしいんだって、そう思ってんのよ」

晴美姉さんの口ぐせのようなその言葉を耳にするたびに、私は素直な心で、うらやましいなと思ってしまう。

どんな夢でもかまわない。たとえそれが他人から見て笑い飛ばしてしまえるほどちっぽけな願いだとしても、その夢に自分の思いを託して生きることができるなら、それはそれでまちがいなく幸せなことのはずだ。地球そのものをひっくりかえしてしまうほどばかでかい夢も、口紅入れの中に隠して持ち歩けるほどちっぽけな夢も、それが夢であることに変わりはない。なにひとつ夢を持てないことの寒さからすれば、どんな夢にだって身をまかせてしまいたくなるほどのぬくもりがあるものなのだ。

晴美姉さんのように最初からそれなりの目的と決意を持ってこの世界に入ってきた踊り子は、舞台を離れるのも早い。それに、だいたいが明るく陽気に毎日を過ごせる人が多い。

誰だって最初はそうなのかもしれない。何か目的らしきものの一つや二つぐらい

は抱えていなければ、自分からすすんでこの世界に入ってくることなどないだろう。ヤクザがらみで転売されてきた踊り子以外のほとんどが、初めて舞台に立つ時のあの鳥肌立つおびえと緊張をなんとか乗りこえるだけのものを、きっとどこかに隠し持っているはずだ。

でも、いつのまにかその目的を見失ってしまうことだってある。信じていたものに裏切られたり、信じるべき値うちもないものを信じていたことに気づいたりした時、心の密室に大切にしまいこんでいた未来図が嵐でズタズタに引き裂かれ、その瞬間から突然に過去と未来との関係がぼやけてゆく……。

そして、そんなふうにして最初の目的を見失ってしまった者は、どういう理由もないのにいつまでたっても舞台から離れられずにいる。その上、どことはなしに気持ちが暗い。ふとしたはずみですぐに坂道を転がり落ちてしまいたくなるような、そんな習性を皮膚にしみこませてしまっている……。

ほろ酔い気分になり、うつろな仕種で布団を敷き始めていると、突然大きな音がしてドアが開いた。

振り向くと、下半身を泥だらけにした民夫が鬼のような顔をして立っている。

「どうしたん、民ちゃん？　あんたまさか」
「なかった……」と、押し殺した声で民夫は言った。
「田んぼの中をいっしょうけんめいにさがしたのに、なかった。ひとつもなかった」
「アホ……なにもそこまですることないやない。あんな石ころ、どこにでもあるでしょ。そんなにしてまで探さんでも、ほしけりゃまたどこかで拾ってくればええんよ」
「ちがう！　あれは、あの石は、そんなもんとはちがう！」
そう叫んだかと思うと、民夫はいきなり飛びかかって来て私を押し倒した。
「マミさんのいじわる！　マミさんのいじわる！」と気違いめいた大声を張り上げながら、彼は私の胸や腹にこぶしの雨を降らせ、力まかせに何度か背中を蹴り上げた。
私はそのたびに痛さで呻き、「なにすんのよ！　やめて！　やめてよ民ちゃん!!」と必死で叫び続けた。
それでも容赦なく私を責め続ける民夫の両手が、不意にむごたらしい強さで私の首に巻きついた時、「民ちゃんやめろ!!」と、明さんの大声が頭上で響いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com